

FFPE 検体の品質向上を目指して

衝撃の精度管理調査結果を受けた当院の足掻き（婦人科編）

◎高橋 珠里¹⁾、澤田 早織¹⁾
浜松医科大学医学部附属病院¹⁾

【背景】

静岡県での精度管理調査では、2021年からはFFPE検体の核酸品質調査が導入されている。その初回調査で提出した当院検体のDIN(DNA Integrity Number)値は1.6で、再提出した検体でさえも2.1という驚きの低値であった。この惨憺たる結果を受け、改善対策に頭を悩ませていた折、婦人科医からも、遺伝子検査を見据えて、検体提出方法を改めたいとの話が持ち込まれた。

【経緯】

従来、婦人科悪性腫瘍の手術では、大網切除やリンパ節郭清を施行するかなり前の段階で主病変の摘出は終わっている。しかし長時間の手術であってもその終了時まで主病変は冷蔵庫保管となる。さらに、検体搬送時間を過ぎた場合は、翌朝までの冷蔵保存となってしまう。この現状を打開するべく、主病変は摘出次第、そのみでオーダーを作成して先に提出し、その他大網やリンパ節は、後から別オーダーで提出する運用に変更した。さらに、主病変の提出がスタッフの勤務時間外になってしまう場合、婦人科医自ら病理部にて検体のホルマリン固定を行えるように、マクロ写真撮影や検体貼り付けのトレーニングを行った。

【結果】

検体提出方法変更前の翌朝提出された検体と、変更後の検体のFFPE検体からそれぞれDNAを抽出し、DIN値を測定した。その結果、変更前は平均2.76（最大値3.3）、変更後は平均3.67（最大値5.8）と、明らかな核酸品質の改善を認めた。この結果は婦人科全体に周知され、今後の婦人科新人教育にもこのデータから得られた、検体処理の重要性を引き継ぐ方針となった。

【結語】

臨床科と協力することで、FFPE検体の核酸品質向上を遂げた。検体の提出方法の改善といった、ごく単純な変更ではあるが、目に見える結果が出たことで、臨床医のみならず病理部の意識改善にもつながったと言える。ただし、臨床科によって手術方針は様々で、全ての科で同じ取り組みができるとは言い難い。依然として課題は残るが、引き続き他科とのコミュニケーションを大切にし、病院全体の品質向上及び意識改革を進めていきたい。

連絡先— 053-435-2549 juri.t@hama-med.ac.jp